

近代青森県キリスト教史の研究（その一）

佐 藤 和 夫

序 章

本稿執筆の意図は、近代化過程における青森県キリスト教史の研究である。結果としては、青森県地方キリスト教史の研究にいささかも役立ち得ることを願うのであるが、近代キリスト教史全般において中央、地方の研究区分は本来意味がない。宗教の使命は個人の魂の救済にある。又伝道はその最大の手段であり、予言者から伝道者、そして民衆へと深く浸透し、より多くの人々に福音や道を説かねばならない。階級を越え、距離の遠近を問わず、全世界の隅々まで及ぶことこそ悲願であり、救世なのである。青森県にキリスト教の福音がのべ伝えられたのは、かかる宗教の使命伝達の結果であり、それは近代日本キリスト教史上に位置づけるべき意義を有し、事実、青森県のキリスト教史を抜きにしては、日本史上のキリスト教史は成立しないのである。

勿論、従来研究されてきた周知の事実以外に本稿執筆のために新しく発見した資料や、再検討すべき青森県千

リスト教史の総合的な展望の再構成のために、具体的に述べることも必要なので、かなり詳細な叙述も行わねばならない。その点では、地方史としてのキリスト教史の形態をとらねばならないが、その基本的な現象、歴史事実は、日本キリスト教史に共通のものであることをあらかじめ了承されたい。

キリシタンと称された江戸時代のキリスト教徒は別として、青森県に明治維新を前後とする近代のキリスト教が伝えられたのは、全国に比してきわめて早い時期である。その伝播の客観的条件は、津軽地方と南部地方では、きわだつた対照を示している。一つは地理的条件。日本海に面した津軽地方は、伝道のルートが旧教関係では函館とつながりをもつたが、大勢は当時の中央都市（津軽の場合は横浜）と直結したのに対し、南部地方は、太平洋沿岸ルートから函館、仙台といずれも密接に隣連し、その両者間において与えられた影響は顕著である。才二は政治的条件。両地方共、その布教対象の中心は士族という没落エリート層であつた点は共通するのであるが、

津輕士族を軸とした津輕地方は、比較的穩健、かつ極端な、時流の落伍的な屈辱感のない、まとまった信者集団であった。南部地方は、八戸藩士族は「全國無比の寵愛」といわれる程であるから、津輕士族と大同小異の信者集団であつたと見てよいわけであるが、旧南部藩、仙台藩の如き維新の變革に大きな苦難をつぶさになめさせられに請藩は、士族達の明治新政府成立以後の屈辱感は、旧南部藩、仙台藩をルートとする伝道が信館と直結する時、当然、南部地方が地理的位置においても、政治的連帶感の上からも津輕士族とは微妙に異つた。オ三は社会的（生活的）条件。代表的な凶作飢饉地帯としてのきびしい生活条件の下におかれた南部地方は、キリスト教信仰において、生産の面における経済的条件と結合することが稀薄であり、津輕が産業開發の面で指導的役割を果したのが、キリスト教関係者であつたことと比較して対照的であつたこと³。以上のような条件において、大きな伝道上の相違があつた。

以下、これらの点について、その伝道の経過を跡づけてみたいと思ふのであるが、扱う分野は、キリスト教諸派の中でも時代の流れに典型的に南進したものに限るため、つまり、正史的感覺においてとらえるため、全ての教派に言及し得ないこと、及び、時代は、青森県の近代化に大きく作用した時期が中心にならざるを得ないので、大凡は明治時代前半が対象となることをあらかじめ断つ

ておきたい。それ故に後考を期し、タイトルも（その二）とした。

註

① 福地重孝「士族と士族意識」、小野又三「青森県政治史（一）」二二の頁。

② 明治元年十二月、津輕承昭は陸奥回三戸・二戸、北三郡のうち、八戸藩・七戸藩領を除いた四万五千三百五十三石の統治を命ぜられたが、翌二年一月、この報に對し「陸奥三郡の民は猛然蹶起して不服を唱え、元の如く南部領民として堪置かれたいこと、さもなければ、八戸領民として配屬を願いたいこと、もし以上の二件とも不許可とあらば、自ら陸奥三郡の鄉村を焼払つて焼土と化し、全農民が八戸領民として請願する手筈であると、その數額は甚だ強硬、かつ不穩當極まるものであつた」が、反津輕の動きは「その熱意は到底盛岡近郊、東海岸地方民の形式的一揆と異なり、正史に生くる民衆の雄叫び」であつた（『岩手県史』オ六卷近代編一、小野又三前掲書一〇九頁）。

③ 南部南拓者として新渡戸伝、玄米安任りの功績を見るがキリスト教クルーフではなかつた。ジョン・インズやフォーリーとリンクとの関係は伝説的でさえあるが、彼らの功績は特筆しなければならぬ。

津輕地方のキリスト教伝道史上、必ず挙げなければならぬ人物は本多庸一である。本多の入信は、本多自身の転換となつたことは勿論のこと、津輕の恩徳、宗教、教育等の精神文化にとつても大きな結果をもたらした。しかし、それは本多個人の天分による結果ではなかつた。そのような人物を生み出した津輕の風土と歴史に、彼の人生への影響を覚えるのである。本多は、日本の本多、世界の本多であり、日本フロテスタント史上一きわ異彩を放つた大人物であつた。その入信の経路は余りに有名であり、幾多の関係者の手によりその詳細は報告されており、私も旧稿により紹介したこともあるので、概略に止めるが、彼の武士としての儒教的世果観（朱子学から陽明学への関心の転換）、幕末維新の佐幕意識が、現実におかれた彼の状況を一変せしめた点は注目しなければならない。

明治三年頃、津輕藩校稽古館の年長者であつた佐藤弥大が、横浜から漢訳聖書（新旧約四巻）を持ち帰り秘蔵せるものを、ある時本多は借覽する機会があり「神元始に天地を創造す」とあるのを見て非常に驚き、それまでの朱子学的宇宙観から完全に訣別したのである。この二とは「植村正久とその時代」才四巻に収載され（「音声と聖書」八頁）、「本多庸一伝」にも明記され、山路愛

山は「現代日本教会史論」の中で、次のように本多の言葉を紹介している。

「余が著は朱子学を以て士人の学と定められども、余は朱子学に満足する態はざりき。余は固より朱子学の宇宙観の如き高尚なる哲理に就て深く味ひたるには非ず。さる哲理は余の教へられたるものには非ず。余は唯、西郷元対の末節に汲々たる朱子学の煩瑣なるに満足する態はざりし」のみ、されば余は藩学校の庫中に在りて、学生の容易に見ることを許されざりし陽明文庫、伝習録を辛ふじて借り得て之を誦みたり。余は又同じ理由に依つて、熊沢蕃山の集義内外書を誦みたり。而して陽明学の朱子学よりもより多く自然なるを喜べたり。余が基督教徒たるに及んで、藩の故老は曰ひき果然彼れは陽明学の書を読んで先づ邪徑に陥りたるが故に更に基督教に陥れりと」

愛山は、陽明学からキリスト教への、本多の前記漢訳聖書借覽の部分について叙述していないが、聖書との出会いは回心の啓示と見なすべきものであつた。同じような青少年時代をおくりに盟友菊池九郎に、本多のようは回心の動機が記録の上で全く見られず、かつ推測の可能性すらないのを見ると、儒教からキリスト教への回心は一般論で処理してしまふことはできない。本多には他の同輩と異なつた宗教意識の横溢が見られるのである。彼のこのような宗教意識は、単なる一個人の特性として箇

単に見のがし得ない問題で、彼が横浜遊學によつて生涯の良き師・バラの薫陶を受けたことにより、彼の宗教竜藏を顕在化させるその時を得たのである。一方、菊池九郎は政治的資質においてすぐれていたその父を、福永諭吉の慶應義塾で学ぶことによつて、福永流の功利主義を身につけ、稽古館―東興義塾の転身、経営にその所を得たのである。³明治七年、東興義塾は本多の学識を必要とした。ジョン・インズを横浜から伴つたのは、キリスト教宣教を目的とせず、公的には英語教師として契約したからにはかならないこれは全くの偶然からであつて、カトリック「弘前教会史」(日)にいまの如く所収、昭和十一年によつて、明治五年にパリ外国宣教会アリウエ神父が、鰐ヶ沢の医師岸篤(カトリック信者、東京で受洗)の世話で東興義塾の語学教師になるつもりで弘前に来たところ、すでにプロテスタント宣教師と契約済みであつたという。この年には十一月東興義塾として発足し、アメリカ改革派教会宣教師ウオルフ夫妻が招へいされている。アリウエ神父は止むなく植田町に家を借り、フランス語塾を経営し、その傍ら秋かに布教し、二、三名の受洗者を得たが、余り見るべき成果なく、二、三年で帰郷してしまつてゐる。そのうち東京帝国大学の教授となつてゐるから凡庸な人物ではなかつた。東興義塾とのその後の縁不縁が、カトリックとプロテスタント布教の分岐点になつたといつてもよい位である。フォーリー神父

のように植物や農業(特に果樹)と結びつき、大抵は指導性を有したカトリック側の例はあるにせよ、本多りのような東興義塾と民権運動のような啓蒙的政治活動となつたかどうか、又新聞やその他出版活動を通じての義塾派といわれたいやうな華々しい活動となり得たかどうかは疑わしい。このような意味での東興義塾に關する、この時点でのデノミネーション(Denominational)の向題は、はなはだ興味深い。

本多は明治五年五月四日(旧曆)、日本最初のプロテスタント教会として設立された日本基督公会(横浜公廟、現在横浜市海岸教会)で、タムソン師より受洗した、明治初期プロテスタントとして数少ないクリスチヤンの一人であり、横浜バンドを代表する著名人となつた。教育的活動の面では、東興義塾の発展と共に有能な後継者を生み出し、東興義塾の名声を高め、自由民権運動においては、東北奥羽を代表するほどの目立つた働きをしてゐる。⁴又義塾派を中心とする人々は、政治運動と教育との混同により、義塾とは別箇の組織共同会を結社し、政治結社として演説会等を開き、啓蒙活動を積極的に展開したが、⁵本多の民権運動について惹起するところは、キリスト教的人道主義に基づく平等愛から発したこととは當然のことながら、どうも民心の政治に対する啓蒙甬路と共に、東北奥羽の振興に重点があつたようである。彼の使命意識として痛感されるのは、明治維新の際、奥羽引藩

同盟に加わつた奥羽諸藩の維新後における政治的不遇を
まのあたりに見て、政権の主流から除外され、且つ又、
圧迫された者の立場がいかにもじめで理不尽なものであ
るか、という義憤感情である。一般に弘前士族は難治で
あると県官が回顧したような薩摩士族に似た傾向の気質
があつたといわれるが、戊辰戦争における津軽藩の佐幕
派の中心であつた本多は、横浜で新しい時代の感覚を身
につけてきたとは云え、つねに変わらぬ潜在意識として政
府批判の思想をもつていた。会津藩が斗南藩として二十
三万石の大藩が、わずか三万石に減封され北斗の地に転
封された惨状や、盛岡南部藩、仙台藩、庄内藩等に対す
る冷遇の有様は、彼の眼には奥羽地方が知識が低く、
中央から遙隔の地にあるために、全国的な視野で時局を
通視できないため、目前の利害に左右され、全体的統一
を妨けられたが故の結果であると映じたのである。幕府
存続の不可能性については、本多や菊池は或る程度見通
しを持っていてたであらうし、時代の流れを本能的に感じ
とつていたにちがいない。ただ当時の奥羽の諸藩の炯眼
の士は、創幕が薩長兩藩の陰謀に出ずるものであるとい
う考えであり、奥羽鎮撫の大山格之助、世雄修蔵らの参
謀の動きに、この推測を裏付ける不審な物もあつたこ
とも事実であるから、本多や菊池の行動もこのような大
義名分の名において、又ずからの野心を推し進めようと
するかのよう、薩長の態度が映じたものであらう。明

治十年の西南戦役における菊池九郎をはじめとする義塾
一門の義勇軍参加は、新政府に対する忠誠であり、薩摩
士族に対する憤りでもあつた。又後年、本多が伊藤博文
に宛てた書簡にも

「維新の際に、西南の無益戦にして無同情なる青年政
治家が東北を蹂躪することなかりせば、東北の進歩は
猶十年を早めたるべしと感ずる節も有之候」(『本多庸
一先生遺稿』六九。頁)

と奥羽の後進性の理由を西南雄藩、つまり薩長の無思慮
な方策に求めている。このような時流に対処する能力、
団結力の不足にあり、そのために奥羽発展のチャンスな
逸した、と考えるのであり、自由民権運動はその意味で、
戊辰戦争の二の舞であつてはならないと願つたのである。
このような体験から本多の思想は、徒らに対立を招いて
大局的利権を失うことを恐れるため、常に団結、協調の
路線に終始しようという方向に進む。県会議長時代の津
軽、南部の対立を「客観的にそうなつていった」とい
形で、自然にまとめたという抱擁力、メソジスト三派台
同に果たした推進力、その他細かいことがらまで等けれ
ば、枚挙にいとまない程の彼のスケールの大きな円満性
は、この上述のような意識から結果したものである。日
露戦争の協力活動や、公会主義からメソジスト派移行の
向題等も、このような点から再考すべきであらう。東奥
義塾―共同会―自由民権運動―政治家活動という結び

きに對して、東興義塾―弘前教会―宗教活動という、彼の宗教活動の本質的面は更に注目されなければならぬ。

弘前公会は、明治八年十月二日、本多、菊池圃之助、川村敬三ら二十二名の會議において設立の決定を見た。正確には「弘前日本基督公会」となったのであり、公会主義の方針に添つて出発したものであった。公会主義は「直ちに耶穌キリストを信^①ずる」という基本的態度を出発点とし、公会基礎として

「宗派ニ屬セズ唯主耶穌キリストノ名ニ依テ連ル所ナレバ單ニ聖書ヲ標準トシ、是ヲ信ジ是ヲ勉ル者ハ皆是キリストノ僕、我儕ノ兄弟ナレバ会中ノ各員全世界ノ信者ヲ同視シテ一家ノ親愛ヲ希スベシ、是故ニ此会ヲ日本國基督公会ト称ス」

と云う日本基督公会條例を明記したのである。そして、教会政治においては、外國の何れの教派にも屬さない、日本獨立自治団体として建設したもので、山本秀雄によれば、その目的とするところは

「將來純々日本に設立せられんとする新教各派の教會を合同して無教派主義の一同となし、其勢力を集中して日本の宗教界に活躍し、實國以て異教徒に當り、因て以て日本に基督の聖的王国を建設、拡張せん」(「日本基督教会史」)

とする崇高、偉大なものであった。

この最初に設立された横浜公会の成立は、米國改革派

教会、長老教会に屬する宣教師の教導に賣^②る所大であった。それぞれの新教各派は正史的伝統を持つものであり、宣教師連の教派意識は容易に妥協を許されるものではないが、公会は聖書の福音に準じ、超教派的信仰を維持しようとする趣旨から「教会」の名称をとらず「公会」とあえて称した日本人の意志に従ったのである。^③弘前公会は、本多が東興義塾々長に就任すると同時に布教活動を精力的に展開し、早くも明治八年、東京公会、神戸公会、大阪公会に次いで弘前公会を組織した。^④ところが、公会主義はぐはて明治十年以後、實質的に宣教各派の關係により維持できなく有り、すでに明治七年の横浜才一長老公会を皮切^⑤りとして、東京才一長老教会・法典長老教会・品川長老教会、大森長老教会が設立され、長老派教会として分離し、聖公会派はウイリアムズの活躍により各地に教會を設立していった。一方アメリカ、バプテスト外國伝道会は、ネーサン・フラウンが、公会とは無關係に明治六年横浜にオーバプテスト教會を設立、旧教側でも、ローマ、カトリックやギリシヤ正教各派は独自の布教活動を行つていた。そもそも日本プロテスタントの受容意識は、偏教に基礎を置くものであった。維新の激動の中にあつて偏教に「ちかわれた青年達は、その思想的執り所を失ひ自信を喪失していった。いわゆる自己卑下^⑥に陥ち入るものである。特に外國文明を知つた時一層深刻になつた。そのような中で、本多の回心に述べられ

ているように

「無関心に等んだ聖書の中の数多くの教訓や教義がよみかえり（中略）直徳感が鋭敏となり……理想は高揚し……自分は罪人であり神と人間に対して大きな道徳的責任をもち、自分自身を救うことはできないといふ……救しい葛藤」

がこれより横決へ直行するといふように、無価値、無能力を感じる自己卑下の感情をキリストの福音の中に救済させてゆくのである。儒教的伝統に培われた彼等にとつてキリスト教は対立するかに見えたと、天の概念がキリスト教の神と類似性のあることが明らかになるにつれて、「キリスト教は儒教の成就である」^⑧ように思われ、山崎闇山は、「基督教化せられた儒教主義」と表現しているが、「すべて空間的階位的に上に位置しているものを『カミ』^⑨という」日本人の思惟法が上帝・昊天・神といふ概念で、比較的スムーズに儒教からキリスト教へと移行したのであった。

弘前教会の初期のメンバーが士族出身（旧津輕藩）者でまゝとまり、エリート層を形成していたことは、本多、菊池一東興義塾というコンビネーションから当然そのなつたが、後述するように、この傾向はキリスト教史の上で全国共通の現象であり、江戸士族とギリシヤ正教、聖公会派にも見られる。士族が政治や思想、教育、文化方面に指導力を發揮したのは、幕末・維新・新政府といふ

過程の変革期に主役としてその姿に翻弄され、新時代の動きに否応なく直面させられたからであり、士族のものの教養が、その支軸として大きく活用されたからである。しかし、明治中期頃から次々に平民層が抬頭し、士族層との意識の差がなくなるにつれて教会としての発展は、これら中堅層教会員や、伝道の後継者の如何によつて、大きく明暗をえがき出すようになる。後述の八戸光榮教会（ギリシヤ正教Ⅱハリストス教会）が明治三十七年頃解散して、今日多少の記録を伝えるのみで、輝かしい貢獻が過去のものとして僅かに詠りつがれるのに対し、メソジスト弘前教会のように現在陪賓会員四百人以上を有し、十数万の人口をもつ地方都市の教会としては十指にひとひらいた特異性と教養を誇り、更に重要なことは、県内はもちろんで、日本各地に多くの有能な伝道者を二百名余送り出し、弘前教会に關係した人物を加えれば、更に多くの教職者が働いている、といふまさに弘前バンドと呼ばれるにふさわしい存在もある。このことは本多が陰に陽に、弘前の現任牧師の地位を去つた明治十九年以後も、中央にあつて弘前教会のために助言、指導を怠らなかつたためでもあるが、教会自身が本多の支援から更に先んじた力強い歩みがあつたからである。更に伝道者として集立つた青年の大部分は、東興義塾に集まり教育を受けた者であることは、弘前教会が明せずして人材を兼ね得るといふ利点となつた。参考までに県内各教派の状況は左の

通りである。

大正元年 昭和十年

天主教 四 四

ハリストス正教
(ギリシヤ正教会)

五 三

日本基督教会 一 二

バプテテスト教会 一 一

日本メソジスト教会 六 八

日本聖公会 四 四

東洋宣教会
(ホーリネス教会)

一 一

基督教救世軍 一 一

(竹内匡平「青森県歴史」三三八頁)

これらの中で戦後(才二次大戦)急速に増加し、全般的に教勢も拡大され大きく飛躍した教派は大部分であるが、又新しく宣教に加わった教派もあるが、ハリストス正教は、大正元年、五に對し、昭和十年、三と減少し、

昭和三年に編纂公刊された「青森県総覽」宗教史、キリスト教の項には紹介記事が見られない。例えばメソジスト関係は当時の才一線の関係者がレポートしたもので、

現在弘前教会名誉牧師藤田恒男師もその一人だった(同師談「昭和四十四年」)。そうであるから、ギリシヤ正教

が昭和の初期に布教の才一線で、教会組織の中で充分な働きをどの程度の範囲まで行っていたのか不明であるが、

目立った動きはなされていなかった、ということとは推定

できよう。現在の青森県内の各派の大半は才二次大戦後に設置、活動されたものである。各教派別は左の通りである。なお教会、伝道所、講義所全てを一として教えた。

日本基督教団

(旧メソジスト、日本基督教を合併)

二〇

日本聖公会

六

日本バプテテスト連盟

五

日本バプテテスト同盟

一

日本ホーリネス教団

二

基督教救世軍

三

基督教の教会

一

青森県福音キリスト教会協議会

六

原始福音(神の幕屋グループ)

二

日本カトリック教会

十六

ハリストス正教会

二

(「日本基督教団年鑑」一九七〇年版)

次に、弘前教会関係の中核になつた人物及び、伝道状況を見てみよう。最初の教会興とつた人物の中で、実質的にその後の教会発展に尽したのは山鹿元次郎である。

安政五年、江戸津輕藩邸に生れ、藩校稽古館、東興義塾に学び、その間本多の感化をうけ、特に明治十年「新平民」と呼ばれた人々に対する本多らの伝道は、キリスト教精神の実践として山鹿に大きな励ましを与えた。山鹿

の同僚達は、それぞれ秀才、英才ぶりを発揮し、菊池軍之助、川村敬三らはアメリカ留学、珍田捨巳は将来外交

の助、川村敬三らはアメリカ留学、珍田捨巳は将来外交

官として活躍するし、親友山鹿旗之進はのちに精次、名古屋、鎌倉及び湘南地方にて大を与傷ぎをした。そのような中において上京、留學といふこともなく、石けん製造、青森新庫の運賃に従事、そのため明治十八年筆禍により入獄という苦難が続くのであるが、同十九年、来徳せ学校（弘前女学校）現弘前学院の設立と共に校主となり、教会、幼稚園と共に終生深い關係を有した。弘前教会及び義塾の青年達は、本多ペインクの指揮の下に各地に布教を行い、明治十一年頃、本多自身は単独伝道を盛んに行い、インクは書簡中に

「本多兄は到るところ福音宣伝の機會を得、且つ聖書の分冊をも販賣し傳申し候。本月（明治十年十二月）は弘前より北西に当れる地方に活動し居られ候。そこは日本一の北西海岸の左端なる地域を包括するものに御座候」と述べているが、これは後述の本多の伝道日誌に見える深浦方面伝道のことである。既に東奥義塾々頭として、又弘前教会伝道師としてこのような陣頭に立つていたのであるから、本多を尊敬する青年達が奮起しない筈がない。明治十一年六月、本多の弟育が青森伝道開始、弘前教会信者で青森医学校生徒であつた三、四名が集會者であつたが、十三年には医学生長谷川有造らで説教の他に文学を主とした頭幽社を起し、教育宗教談を月二回、師範学校長藤田某、県方学務長日下部、学務課小野某や山田源次郎らを演者とし、天童湖源の漢文を持ち出し、集

會を開催した。ようやく軌道にのりかけた頃、本多育は、十四年春、函館教会牧師又買のため青森を去つて赴任した。正式伝道はこれで中断した形となつたが、山田源次郎、若山辰五郎、野坪安郎、田村東穂等は一致協力して福音伝道と証しを行つていつた。十四年頃は日曜日の集會者は七名程、聖書講義は今日日曜学校で生徒に教える程度程の簡単なものであつたが、十六、七年の教勢は年會記録によると、巡回伝道者一名に出席者四十名、受洗者九名というように増加し、教会組織の形成が知られる。

山鹿元次郎は青森在監中、伝道者となる決意をかためた。その悔い改めは青森教会でなされた。十二年に本多庸一は執事（補教師）の按手礼を受けたが、それまでは長老という資格であつて教職者ではなかつた。だが、歸弘後は事實上「定住伝道師」として活動していた。更に十六年、正教師の按手礼をうけ、資格上にては布教の中心となつたが、十一年の青森をう始めに、黒石にも伝道を行い、市内和徳町に講義所を開いた。国会開設の議論高まつてきた十三年頃（註4、参照）から、本多、菊池九郎を中心とする自由民権運動は津輕地方に緊張感を生み、義塾派共同会の古坂啓之助、服部尚義らは政談演説會を各所に開いた。十五年一月頃、本多、山田源次郎らは藤崎町へ演説にゆき、政談と共にキリスト教講演も行つた。その時に、異色の伝道者となつた藤田匡（弘前教育會名譽牧師藤田恒男師尊父）が本多を知り、將來の方向を見定

めるのである。藤崎教会の設立は、正式には明治二十四年七月、東京で開かれたオハ西美以教会参加の結果、藤崎美以教会として、弘前美以教会、藤崎講義所から昇格し、日本メソジスト最初の自給教会として発足することを認められた時に始まる。だが二十四年まで実質的には弘前教会の感屋として大きな働きもしており、最初の受洗者藤田匡は津輕三奇童と称された秀才で、津輕藩儒者兼松成言の私塾及び、宮崎愚に和漢を学び、十五才で失明、按摩となつて生計を支えたが、友人佐藤勝三郎・長谷川誠三らと共に政治に関心をもち、本多らが政談演説並に説教に來訪するや熱心に聴聞した。以来毎週藤崎から弘前教会までの八キロ余を言且の身で、まさに杖を頼りに歩道の道を歩いた。十五年一月、弘前教会で受洗した。十七年、佐藤勝三郎・藤田美蔵も受洗、毎日曜日朝は十番名簿列をなして弘前教会に赴き礼拝を行い、夜は佐藤勝三郎宅にて伝道集會を興き、更に佐藤は藤崎小學校の監務委員であつたから、有志の清水滝次郎と相談し、当時青森浦町小學校長で熱心な信者であつた米井弘之助を藤崎小學校長に招き、十八年八月末任以來、教育に従事するかわり聖書講義などの伝道活動を行うようにするなど、藤崎バンドは積極的かつ意欲的に働いた。弘前教会からも本多、古坂、珍田権巳、山田源次郎らが熱心に伝道に努めたが、特に教会設立には古坂が熱心につとめた。古坂隆之助は山鹿元次郎と同年で、明治九年インク

によつて受洗、十年十二月にはその熱烈な信仰牧群のため弘前教会勸士にあけられ、のち九州の各教会牧師を歴任、生涯の大部分を九州でおくり、熊本県山鹿町で歿した古武士の面影を残した人物であつた。明治十八年、弘前教会で受洗した者十名に達したので、十九年に藤崎講義所となり、二十年会堂を建築した。献堂式の日を受洗したと各中に長谷川誠三がおり、彼は家業の酒造業を信仰の故に廃し、味噌醬油の製造業に転じた程の熱心な信者であつた。藤崎教会の特徴は、農村教会であつて士族集団ではないことである。廃藩後、本多らの士族は藤崎村等に土地を給与され居住はしたが、彼らの生活意識は弘前を中心としたものであつた。藤田匡は秀才であつたが武士ではない。藤田の同志の佐藤勝三郎は、りんご栽培の先覚者で村會議員をつとめ、敬業社設立に中心となり、明治三十四年解散後単独で経営、陸奥鉄道(川部・五所川原間)敷設に関係した。長谷川誠三は佐藤勝三郎の義弟で東葉界で活躍したが、後年(明治三十九年)信仰上の問題から(内容不明)藤崎教会を脱会、ブリマス派(無教会派, Pignault, Bartholomew)に移り、本多らは仲介の勞をとつたが、ついに復帰することなく教会発展の上で大きな打撃となつた。このよう巨大地主や実業家が教会員として伝道の中核となつたため、経済的には他教会より富裕であり、明治二十四年藤崎美以教会設立と同時に自給教会として出発し得たのも故なしとしない。

各メソジスト教会の會員と教師給料決算との対比を、明治二十九年の才七回青森庫回会記録によつて見てみよう。

	青森 八戸	弘前 黒石	滝崎 岩手 岩館	大館 秋田 能代
会友	四五	九八	二七	三三
教師給料	二,一〇〇	八,四〇〇	五,六〇〇	三〇,〇〇〇
			七,〇〇〇	七,〇〇〇
				一〇,〇〇〇

自給教会であるから絶額が記載されている。他教会はそれぞれ補助によつて経営されたが、これによつても、滝崎教会は豪農、実業家を中核とする典型的な農村自給教会と云えよう。

メソジスト派の教会は、このようにして明治二十年前後にかけて、弘前教会を中心に波紋のように津軽全域に及び、大きな働きを示していつた。この頃までは弘前士族が教勢発展の中心となり、政治運動と共に意気天をつくものがあつた。仏教徒との公同討論を大衆の前で壇堂と行い、相手を弁駁したのもこの頃の伝道への熱意を感じさせる。

津軽地方ではこのほかにカトリック教会と聖公会について触れなければならないが、その組織上、渠全体の展望において論すべき性質なので他の機会にする。

註

①本多庸一に関する人物評伝は、岡田哲蔵「本多庸一伝」(昭和十年)・青山学院稿纂「本多庸一」(昭和

四十四三年)があり、人物評論としては、相沢文庫「明治の人々」本多庸一(「直標」十四七号、昭和三十一年八月)、辻篤「本多庸一に就いて」明治初期プロテスタンティズム(「弘前大学国史研究」五十号、昭和四十二年)がある。

②菊池九郎については「菊池九郎先生小伝」(菊池九郎先生建碑会刊、昭和十年)、「菊池九郎」(藤田李太郎「儒士の先人を語る」(2)、弘前市立図書館発行、昭和四十三年)がある。

③「東奥義塾九十五年史」(昭和四十三年)。

アリカエ師が何時弘前へやつてきたかについては明治五年と七年の二説がある。その時に義塾の塾学教師にまづいていた米人は誰であつたか、ウオルフがジョン・インクか。明治五年説をとるが、「青森県誌」(昭和三年)には、明治五年アリカエ師が函館より来青、弘前へも巡回したとあり、七年にフォーリー師と替つたと記し、小野忠亮「青森県とカトリック」(つとう五十二号)はやはりこの見解に依つている。そうすると来弘当時の先約すみの宣教師はウオルフとなる。これに対し、「カトリック弘前教会小史」(昭和十一年)には「メソジスト派の米人を招聘し……この米人等によつて塾はすっかりメソジスト化された」と述べており、何年とも、誰とも明記してはいないが、メソジスト

派と云えばインクをさすから、七年ということになる。「弘前市史」も七年・インク説をとっている。この点若干の食い違いがあるが、いずれにせよ、ロテスタント宣教師に先をこされたわけである。

(4) 明治十三年、五戸の民権家中市稻太郎と本多は陸奥八郡を代表して国会開設の建白書を元老院に提出している。小野文三「青森県政治史」(一)四九三〜四九六頁。

(5) 小野前掲書四八七〜九〇頁。「弘前市史」明治大正昭和編三十八〜四〇頁。

(6) 塩谷良翰(明治七年十月、県大参事)回顧録、前掲「弘前市史」十七頁。

(7) 「共同会結成宣言書」(青森県総覧)

(8) 旧鶴岡藩士保野時中の講演「山形県史話」(昭和八年、山形県師範学校編、小野文三前掲書二十三頁所収)

(9) 青山学院編「本多庸一」九六頁

(10) 明治五年公会仮規則並内規定

(11) 石原謙「日本キリスト教史上における公会主義」へ「文化対キリスト教の諸問題」所収、同「日本キリスト教史論」

(12) 「弘前教会五拾年略史」(大正四年)

(13) ジョン・F、ハウズ「日本キリスト者とアメリカ人宣教師」(M、B、ジヤンゼン編「日本における近代

化の向題」昭和四十三年、岩波書店)

(14) 「本多庸一先生遺稿」(青山学院編、大正七年)

(15) 渡瀬常吉「海老名弾正先生」九十頁、松村介石「信仰五十年」

(16) 前掲註(3)書、二四四頁

(17) 基督教評論、中村正直に対する評。小崎弘直は「我が儒教より進んで基督教に入つたのは、彼を捨ててを取つたのではなくて、基督教は儒教の精神、孔子の教の真意を成就するものなることを信じたからである」(「七十年の回顧」全集才三卷)と述懐している。

(18) 中村元「東洋人の思维方法」(才三部「日本人の思维方法」)

(19) 直接士族につながらない青森、藤崎、八戸にメソジスト教会が設立されるのは明治十七年(青森)、同二十四年(藤崎)、二十七年(八戸柏崎)の約十年間である。藤崎教会名簿には士族が一人もっていない平民の教会である。

(20) 山鹿元次郎については「山鹿元次郎小伝」(古田十郎編、昭和四十一年、私家版)、及び陸奥新報連載「ここに人ありき」埋もれている郷土の先覚者列伝「才十話」山鹿元次郎「船水清氏執筆、昭和四十四年三月十日〜五月十日、参照。

(21) 「弘前教会五十年略史」、註(20)「ここに人ありき」、

「本多第一」八四頁。

(2) 本多から二十一年副牧師として招かれたが、山鹿は翌年に米沢教会に正牧師として任命されたため、僅かの期間しか神学生としての体験をもたなかった。

(3) 「弘前教会五十年略史」三〇、四、五頁。山鹿嶺主進抄談。

(4) この頃青森伝道の中心は中田久吉であつた。青森教会初代牧師として明治十七年九月三日任命されている。

(5) 「青森教会宣教九十年略史」(昭和四十四年)

(6) 「本多第一」八四、五頁

(7) 「弘前教会五十年略史」

(8) 東興義塾小学課員、明治十一年共同会責任者、同十三年同会陶穀の県内遊説、三戸、上北郡を担当。のち税務署長、五十九銀行青森支店長、東興日報取締役(青森県人名大辞典)

(9) 「青森県総覧」七四九、五頁、藤崎教会の項。

(10) 同右

(11) 註(20)シニ二人ありき。参照。

(12) 藤崎教会佐藤篤二氏蔵。翁の御好意により拜見することができた。

(13) 藤田匡は劇場で公南討論を明治十七年に、笹森良逸・高杉良弘と行っている(「弘前教会五十年略史」・「弘前教会正史の歩み―略年表」)

(14) 簡単に紹介しておく。明治五年、フランス外國宣教会アリウエ神父が函館から東興義塾教師になる予定で弘前へ来たことが最初で、アリウエが弘前を引きあづかるに際し、フォーリー神父に引きつぎ、フォーリーは明治十七年、青森県及北海道の正式巡回教師となり、県内では弘前、青森、三本木、八戸教会等を回り、明治二十九年、青森教会の主管者となつた。青森は明治十七年、寺町霊屋の二階を借用し、カトリック教会の看板をかかけたのはじまる。弘前は明治十一年、マラン神父が本町三丁目角(後山崎築局角)に「天主公教会」の看板をかかけたことにはじまり、十五年、フォーリーがやうてきて百石町小路に教会堂を建設した。三本木は明治十七年、土地の素封家(八戸教会名義によるとサカマ○印とローマ字で記入されている)三浦右之助に先礼を授け、二階を解放されて礼拝を行うことが最初で、八戸はそれより遅く、明治三十一年頃、函館司教ベリオーズ、フォーリー、モンジユ、レーノらが交代で巡回布教に訪問したことはじまり、廿八日町に仮住していた三味線師夫妻の二階を仮教会堂としたことにはじまる。(以上「たいまつ」所収各教会小史・小野南亮「青森県とカトリック」一〇とう五十二号)「青森県総覧」・青倉森ハ「青森建設の困人たち」及び南野教会、南係者の談話、記録等による)。

明治二十五年、青森在住の弁護士土川宗之進夫妻、
奥屬上田某夫人ツルコらの信者が、聖公会の青森伝
道の方針を忠実に実行し、二十六年伝道師小畑貞恵
兼任、講義所を創いたことにはじまり、同年伝道師
松下一郎兼任、翌二十七年教会組織となった。弘前
聖公会は明治二十九年に本町一丁目に最初の講義所
を設置、三十三年に山道町に教会堂を建て「山道所
聖堂」と称した。三十五年から二年間、後に「米田
聖公会総裁主教」となり、立教大学に深い関係をも
したタツカーが主任伝道をしている。八戸は明治三
十二年、青森から松下一郎（前立教大学総長松下正
壽氏算父）が伝道におもむき、八戸聖路加教会を設
立した。（以上「青森県誌」、「弘前市史」及び
教会関係者の談話等による）。

第三章 南部地方の伝道形態

津軽地方が良きにつけ悪しきにつけ士族集団がキリス
ト教活動の中心になり、更に本多磨一というエリート中
のエリートをリーダーとしてプロテスタント、キリスト
教の影響を大きく受けたのに対して、南部地方は士族集
団という点においては津軽と同様の受容形態を示してい
るが、その宗教が旧教側のギリシベ正教を奉じたとい
う点において対照的であった。八戸南部の中心八戸藩は、
戊辰戦争当時津軽藩と戦火をまじえ反官軍的行動をとっ

たが、島津家との関係（八戸九代藩主信順は薩摩二十五
代藩主聖豪の五男）や、野辺地戦争が大局決定後のこと
で、そして大勢に影響しなかったこと、その他官軍への
協力的な誠意ある態度などから二万石の本領を安堵され、
更に廢藩置縣に際しては、旧藩所有地が国有化されるこ
とを見通した八戸藩の中心人物太田成城の努力により藩
士に分与され、士族特権のあの混乱による没落の中にも
比較的余裕のある安定した生活が保証された。同時にそ
のような思いきった要求成功したのも、藩政時代禄高が
地方知行の形で支給される地方知行人が多く、実際に土
地持に変わってまごついた津軽藩の士族よりは土地経営、
管理が身についていたためにによる。八戸士族のこの時
の分与された土地が地租改正の際、個人所有として認め
られたという幸運もあり、更にやはり太田成城のような
スケールの大きな人物が変革期に出現したことなどが、
八戸士族を時代の浪浪から守ったと云えよう。そのよう
な士族が南部地方のエリートとして時代の動きを敏感に
とらえ、大衆の指導者として生れてくるのは当然であり、
青森南部、岩手の生産力の弱い民衆の低い地帯に著名な
人物が輩出したのは偶然ではない。会津藩（斗南藩）士
な沢安仕は、小川原湖の近くに英國式大農場による牧畜
事業をはじめ、新渡戸稲造の祖父伝は、三本木岡拓に礎
石となり今日の美田をもたらした。岩手の鈴木金定は、
福島河野玄中、津軽の本多磨一と共に東北の三傑と称

され自由民権運動の中心として活躍した人物であるが、南部という地域性が生み出した人物とも云えよう。

この南部（八戸）地方に大きな影響を与えたのはギリシヤ正教（ハリストス教会）である。このギリシヤ正教の日本伝道に大きく貢献したのは、周知の通りニコライであるが、ニコライの函館への着任は万延元年（一八六〇）のこと、時に若冠二十五才であった。「日本正教伝道誌」（明治三十四年）によると、ニコライが布教をはじめて最初の入信者は、士族沢辺琢磨（ハッセル、のち司祭）である。沢辺琢磨は旧土佐藩士で尊攘の浪士と親交があり、神官の輩として函館に居住した。当時函館は南港場として活気があり、彼のような浪人人物も多く入りこんで行った。函館でロシア領事の子息に剣道師範として接する機会を得、領事館にも出入するうちニコライと出会うのであるが、ギリシヤ正教は神道の仇敵としニコライを詩向したのがきっかけで、必がて正教の講義を聴講し、明治元年（一八六八）入信の意志を明らかにし、洗礼をうけた。続いて沢辺の知友、医師酒井篤礼が沢辺と正教の教理を向答した結果、同年受洗、続いて南部出身の浦野大蔵も受洗、更に鈴木富治なる者も受洗してゐる。しかし、明治新政府はギリシヤ正教を禁制にしており、キリスト教は禁教にほかならなかつた。これらを受洗もひそかに密望にて行われており、函館奉行の監視もきびしく沢辺・酒井・浦野らは鈴木富治の忠告で函館を脱出し、青森から岩手へのがれてい

る。ニコライは、明治二年（一八六九）一旦帰国した後、明治四年再度来朝し福音伝道を開始、明治五年には東京へ向かう。この前後、東北伝道は沢辺琢磨が中心となり、官憲の圧迫に会いながらも精力的に布教につとめてゐる。彼は旧仙台藩士と交友関係があり、延天隊隊長であった函館戦争生き残りの金成善右衛門や、新井常雄の訪をうけている。同四年には、小野、高屋、笹川といった信徒達が仙台布教を東行し、特に仙台藩は維新の際奥羽列藩同盟の中心となり反官軍的態度をとつたため、御一新後の行政機構は他國人に握られてしまった。そのため天官的風潮が強かつた。このような様相の中でギリシヤ正教徒（ハリスト教徒）の集団は、官憲にとつてきわめて衰わしい存在であつた。しかし、同年、仙台の有志が講義所を東一番丁の小野莊五郎宅に設け、のちにこれが仙台福音教会へと発展した。当時の仙台は伊達六十二万石の城下として南部以南・白河以北の文物の中心であり、地方に対する風俗・習慣の影響も大きく、この地帯においてはギリシヤ正教布教の中心となつた。「仙台教会の信徒は何れも士族の輩の及にて、商人としては当時更になかりき」というように、士族集団が中心となつてゐた。明治六年のこれらの布教活動状況は、山形、三戸、山ノ目、平泉、前沢、東山、気仙、高清水、若柳、金成、刈敷、渡ノ波、岩沼、受子、大崎、花刈、伊達、松川、相川、牛馬、大原、築館、津軽、南部地方の他方面に

及び、函館、仙台に近く、又兩者の中間地点のため特に伝道に熱意をもやした。津輕、南部地方は同四年六月、沢田琢麿を中心に伝道され、十二月には、マトフエイ、影田が盛岡に、イヲアン、酒井（鶴礼）が八戸に伝道している。これら一連のギリシヤ正教布教のねらいとしたところは、奥羽同盟によって不逞をかこつ旧南部藩や旧仙台湾の士族層であつた。当時ローマ、カトリックやギリシヤ正教、プロテスタントを向わずキリスト教と名のつくものは全てマソ教であり、特に仙台では、土佐士族、浪江数馬なる者が仙合士族千人ばかりと教会を結成し、物産会を開き市民に利益を与え、教会に勧誘する策ならん、という風聞をまとめ報告した青森県側の記録が「青森県庁所蔵文書」として「青森県史」巻七に所収されている。浪江数馬が日本人最初の正教信徒沢田琢麿の変名か誤聞、誤記によるものであることは、この頃、沢田が神又や教友に宛てた獄中書簡（明治五年二月）に「僕の名前沢田教馬にて当所県庁へ申出候故、此事も不都合はなからぬ様奉頼候」（「日本正教伝道誌」巻二）とあることから明瞭である。ニコライは、沢田逮捕の一ヶ月前に東京へ出立している。ニコライは政府要人に交渉し、五月に沢田らを釋放させている。このような外交的な動きは日本政府への圧迫として受けとられ、青森県行政関係者は異教警戒を令し、既に正教に影響された者に対しては、当区取締を通して「友正」させるよう努力させて

いる。次に長文からこれを紹介する。

今般異教之行ハレ候も是全く内教不晋カ故也。其社中ヲ見るニ多クハ破産道ヲ失ヒ候者或ハ國僻友を失ヒ候者也。御差支モ無之候ハ、僕等説諭友正いたし候様仕度奉存候。尤友正之者ハ其證書為出可申候、又は友正いたし兼候者ハ猶其性命ヲ書取可申上候、此段一先御委任被成下度奉存候

明治六年十二月十三日

才十七中字区取締北村礼次郎

同

松尾紋左衛門

青森県五戸支庁

史生 吉田茂殿

（青森県庁所蔵文書「青森県史」オ七巻）

明治六年十二月といえは、ギリシヤ正教禁制が解かれてから既に十ヶ月も経過している筈だが、ギリシヤ正教に對するこのような警戒ぶりは、特に函館を根拠地とし、函館戦争には仙台や南部藩士もかなり加わっており、そのような庫中とギリシヤ正教の結合は、当然反政府的な不逞なものになりかねない。そのような反官的風潮と結びつくことを恐れたからであろう。メソジストに對してはこのような警戒ぶりではなかつた。「友正」を要する十数名は、三戸士族を中心として仙合士族、盛岡南部士族、斗南士族も含まれており、「破産道を失ひ、あるいは國僻友を失ひ、不逞の者の集團から不逞な氣配を感じ

八戸にギリシヤ正教の教会として、陸奥國八戸光榮会の設立をみたのは、明治九年十月であつた。³⁾この中心に於て活動したのは八戸士族の源最であり、彼のギリシヤ正教との接触は更にさかのぼる。源最についての研究は、中里直氏の「源最評伝」(「世代」十四号、昭和三十一年)が唯一のものだが、彼とギリシヤ正教との關係を詳しく紹介している。本稿も多分に中里氏の研究に資する所が大きい。

源最(一八五〇—一九一八)は、南部を代表する自由民権運動の中心であり、東奥日報創刊、青森県会議長就任、産馬会紛擾事件の指導、八戸線の開通、八戸中孚(高校)の設置等政治、言論、出版、教育各分野に大きな指導力をもつた大人物である。本稿ではキリスト教との關係についての又焦点をあててゆきたい。彼のキリスト教との接触は、明治初年に盛岡で漢訳聖書を買ひ求めた時にはじまる。八戸藩佐重職をつとめる河原水弥兵衛の九人兄弟の末の子として生れ、幼名滝蔵といつた。やがて、八戸藩学校に学び、漢学の素養を身につけ秀才の誉れが高かつた。明治五年生申戸籍施行に伴い、源最と改名した。鹿藩置県後代言人となり、地租改正による訴訟事件などの弁護人として働いた。正義派の代言人には弱小を保護せんとする情熱の士が多かつた傾向から判断して、社会の矛盾と対決する最高職としての使命感があつたのではなからうかと、中里直氏はその理由を求め

ている。才能と正義感プラス地域社会のエリートとしての自負もあつたであろう。更にギリシヤ正教入信において自己の回心による救済から、この時代のクリスチヤンに共通の福音伝道としての実践的行動力が、代言人の生活から更に自由民権運動へとかり立ててゆくのである。この点は津輕の本多と共通する。教派こそ異なれども、彼の信仰の中にプロテスタンティズムを見るのである。

明治六、七年、八戸地方に酒井篤礼と丹波信征が、函館教会社より派遣され伝道しており、官側ではその動きを監視している。³⁾

この八戸伝道により、源最是酒井篤礼より多ちびかれた。年月日は明確ではないが、源らと共に八戸光榮教会の設立メンバーで、のちに教義の解釈の相違から、新教派のバプテスマ派伝道者に転向した中野徳次郎の手記によると、源が当時「ガンガン寺」と云われた函館のギリシヤ正教マ会へ手紙をもつて伝道師の派遣方を要請し、酒井篤礼が当時補祭の職にあつたが八戸へやうてきたといふ。明治六、七年の前後何れか明確ではないが、酒井の八戸における働きは大きかつたようである。

明治八年、源は、県政に関する建言を青森県参事堀谷良輪に至し、一、副戸長一名及租ヲ廢スルノ議、二、五戸支庁ヲ八戸ヘ転スルノ議、三、時税ヲ増スノ議の三項目について意見をもつてゐる。³⁾三は芸娯娯廢止のため多額の税をかけ、庶民の最たる芸娯娯を減じよとするも

ので、娼妓を生み出す社会的、経済的背景を無視し、八方破れとも云える単純な論理だが、その意気や壮たるものである。同年に津軽士族工藤寛蔵（外崎寛）が十七才の若年ながら、時の太政大臣三条実美に政体改革に対する建言を行っているが、既に前年、板垣退助等による民権院設立建白は興材の地にも大きな刺激を与えた。

そのような風潮が、源蔵をして建言せしめたもので、更にキリスト教の隣人愛の具体的表現、実践活動として公娼廃止運動（明治五年、娼妓解放令、明治八年、埼玉県は盗廓廃止）や、娼妓に多額の増税をかけその税で貧学院（貧者の育英）を開けという「救貧社会運動」と密接に関係する。このようなリーダーを中心に、明治九年十月七日、陸奥国八戸光栄教会が設立された。そのメンバーは「八戸聖栄教会名簿」によると源、伴義丸、佐藤正弘、遠藤三男蔵、中里正珍、川口劉庵、近藤賢四郎の七名で例外なく士族である。かれらは近藤賢四郎の三十

五才を除けば、二十才前後の若者ばかりである。二日遅れて高橋政資、岩松定豪、川崎子英、久保忠勝、坂本岩男、関春茂、白井毅一、井河元寿、井川貞次郎（元寿弟）、福田八十吉、池田重吉、源ヒテ（源蔵長女）、久保珪蔵、川崎正次、藤井徳蔵、中野徳次郎、藤井十目助、杉

岩マ蔵、藤井事作、神山休興、神山久忠（休興次男）、神山セキ（休興妻）、神山イソ（久忠妻）、神山キク（久忠長女）、伴正雄、伴シカ（正雄妻）、百嶋浪治、新

井田虎吉、中里次郎、源ヤヨ（義母）、佐藤リセ（正弘祖母）、佐藤モト（正弘長女）が受洗し、明治九年の入信者は、男三十一名、女九名、計四十名である。このうち平民はわずか五名（男、傍線）にすぎない。1、士族中心であること、2、集団入信であること、3、同族、近親者という家族集団を核としていること、等の特徴を示している。これは「同じ信仰告白の上に立つ個々の信仰者の集団」ではなく、「共同体を基盤とする教会の形成」であり、個々人の改宗は、その共同体の性格や、解体の状況、共同体内における個人の地位によって規定されてくることを物語っている。

伝道は、個の発見、個の自覚を媒介としたものであるから、このような個人主義的性格の信仰、福音理解が不充分であると、地域社会から異端として孤立してしまふし、もちろん教会組織はくずれ去ってしまふ。又、教会組織や教団組織内部からの離脱が生ずるのである。キリスト教が、当時の社会に影響を与えた理由として、一、社会問題や常に鋭敏な感覚でとらえて先駆者としての実践活動を行ってきたこと、二、人間性の尊厳を説いたこと、を挙げられよう。一の場合、ギリシヤ正教は源蔵、関春茂らを中心に華々しい活動を見せた。明治十四年から十七年の産馬騒擾事件は、自由民権運動の中でも特異なケースであるが、要するに南部の産馬事業を梟が統轄するということだが、当時民権思想から容認しがたい、と

いつ友官的運動であつた。更に別の友官的運動として、土木道路工事の工夫賦課法をめぐる反対が明治十四年におこり、奈須川光室、浅見礼次郎、成田芳雄らと共に、南春茂、白井毅一、井河元春らのギリシヤ正教会クルーを中核とした暢伸社が、当時東北各地の伝道に従事している源晟が八戸に帰るや、彼の影響によつて法案反対の決意をした。おそらく源は東北伝道中に各地の自由民権運動をつぶさに見聞したことであらうから、本采の正義感から暢伸社クルーに熟っぽく語り、実践を促したのであらう。又、前年、暢伸社設立と前後して設立された弘前の本多蘭一らを中心とする共同会の動きに対するライバル意識も働いたかも知れない。明治十五年、産馬紛争のさなか、奈須川光室、浅水礼次郎、源晟のかりて人夫賦課法案反対運動のリーダー三名が八戸を代表して、ついに産馬事業を民間で計画、実践するという主張を認めさせた。この勝利は民衆の結束の結果であり、旧田名、斗南、盛岡、八戸諸藩の分立した民衆を、闘争の過程を通じて同志的意識を深めたものとして高く評価されている。源晟は、この問題を解決すると再び伝道生活に復帰した。しかし、明治二十年に入ると、県知事鍋島幹の「無神経の人民云々」という、それこそ無神経な失言から県民を刺激した「無神経事件」が発生、当時後藤象次郎の大同団結運動とタイミンクよく、津軽の民衆をはじめ各地方の大同派を燃えあがらせたが、八戸地方の

知事辞職勧告書の有志総代八名の中に、源晟、南春茂が名を列ねている。無神経事件は、知事辞職勧告として運動が展開されたが、源晟は、二十年にギリシヤ正教会伝道師を辞し、自由党に入党、二十二年、奈須川、浅水、南らと土曜会を結成した。更に明治三十四年、源は県会議長に就任、二十六年再任され、翌二十七年、才三回衆議院議員選挙に自由党から出馬、最高点で当選、同年九月の才四回衆議院選に出馬、当選と目ざましい活躍を示し、彼の政治活動も最高潮に達したかの親があつたが、時あたかも日清戦争が開始され、翌二十八年の勝利の結果、アジアにおける地位の確立への一步を踏み出そうとする出鼻をくじくかのように、独、仏、露の三国干渉が行われ、日本は遼東半島における一切の権益を放棄、返還した。以来、日本国民はロシアを仮想敵とし、臥薪嘗胆を合言葉に国力の充実、軍備の拡張に向かつていった。このような国情の中で、ロシアの伝道勢力下にあるギリシヤ正教会が「ヤソ」の中でも、とりわけ陰に陽に反感、憎悪、弾圧の中におかれてゆくのは、時勢の感情であつた。同時に、源は、県政界を代表する立場にあり、彼の影響下にあつた土曜会は八戸周辺部を基盤とするものであつて、士族中心の結社であつたことから、まず八戸市内の反士族的商業人らの抗争が政争の上で源の基盤をくすいていった。露振の目で見られたギリシヤ正教会は、ニコライが、ロシアとは無関係であると宣言せざるを得

なかつた程に批判の目にさらされたのである。明治三十年代以後、土曜会は憲政本党、公民会は憲政院（のち政友会）に属して対立し、三十一年の才五回衆院選では、土曜会に籍をおいた源は、かつての同志の奈須川光宝に敗れた。源は常にキリスト教徒としての信念を持ち、世間の見る目もそのような生活態度に敬慕を表したのであった。そうであるから日清戦後の処理をめぐり、民党は強硬外交の約を打ち出し、政府内では陸奥宗光は強硬派で、伊藤博文と対立した状態であつた時、最終的に伊藤の縁にまつて遼東半島の歸付が決定してみれば、一時前にも源は、伊藤政府の政策に接近しなければならなかつたのではないか、という彼の立場は、青森県選出の菊池九郎、工藤行幹、白鳥夢一の三代義が改進黨と組んで進歩党を樹立し、反政府的行動を示したのに対し同調し得ず、少数派の丙申倶楽部に入つた。これは当時においては背信行為であり、県の大同派は才五回衆院選の立候補を認めず、奈須川光宝を立てたのである。このように彼に対する攻撃は、当然キリスト教徒に対する批判でもあつた。明治三十一年三月三日付東奥日報の記事は、よくそのことを物語っている。

蓋し、慈愛を説き、世界の人種を以て一団とせんことと務めしは耶蘇の教なり。是故に之を信仰する足下の高遠なる理想的眼光より之を照せば、天地は是れ土曜士俗世本夢の如けん。彼戦の利害を別て邦域を限る、

已に非なり。……四海は兄弟なり。宜しく心胸を抜きて相支るべきなり。……且つ夫れ露國は足下の如く広遠深奥なる志操を托き、巨多の金錢を散して宗教を布き、以て士民の敬心を買ひ、而して我其國と盟約和親（狼吞蚕食か）するは、先祖ペートル以来外交の秘計とする処、而して足下は深く之を信仰するの人なり。唯生等國民は愚にして足下か信仰する処の博愛主義を悟る能はず、露教の深理を知る能はず……。

足下は世の所謂英雄豪傑の如く、一世の智勇を竭して大事宣業をなさんとするの人にあらず、又藩閥政府を打破し、國民的政府を建設せんとの精神にもあらざるが如し。唯例の博愛主義に基き、俗世の宝（天國の宝）を積むに怠るるにあるが如し、……天下の有志は熱血焦心政府の匪政失態を罵り國民的彈劾をなし不信任の宣告をなす際に於ても、足下は淡々雲の如く冷水の如し。人足下の大度量に驚き、人呼ば魔道議員と云ふ。亦謂なきにありざるなり（下略）

事實上、彼の政治家としての生命は終るのであるが、それは同時に八戸地方を中心とした南部のギリシマ正教会の終末でもあつた。これらの変化は、歴史的にはナシヨナリズムの勃興、絶対主義國家の強化によるキリスト教の妥協、後退の時期であつた。それは抵抗と拒絶というプロテスタントの価値をみずから踏みにじつた時期でもあつた。明治二十三年の教育勅語の發布、二十

四年、井上哲次郎との「教育と宗教の衝突」論争により、キリスト教は「非國家主義」ときめつけられ、キリスト教界は、李多庸一、内村鑑三、高橋五郎、小崎弘道、植村正久、横井時雄、大西祝、柏井義田、山路愛山等が、それぞれ論陣をはったが、日本が天皇制絶対主義の下に、資本主義的成長過程にあった世界史的発展の曲車の前に、充分なる説得は不可能であった。このことは、キリスト教が日本的な精神的風土へ定着する過程での副期的な状態であつたと云えよう。²⁾ 明治三十二年、文部省訓令才十二号事件は、キリスト教主義学校教育に対する弾圧であつたが、徴兵猶予の特典を剥奪されたこれらの諸学校は、次々と屈服していった。³⁾ 青森県の場合、東興義塾はこれにどのように対応したか不明である。

ギリシマ正教における源晟の、政治家としての背信行為に対する庶民の不信は、ギリシマ正教の衰退につながつたが、しかし、本質的には、源個人と八戸のギリシマ正教会（舊家教会）の没落は、別々の次元で理解すべきことなのである。その理由は、源の同志であり、後継者であり、よき補佐役でもあつた南春茂（源より七才年少、士族、ギリシマ正教徒、八戸光栄教会設立メンバー）が、明治三十七年三月、既に日露の戦端開始されたさなか、才九回衆議院に堂々当選、源の志をうけついでいることから、個人の節操と実践的行爲の向題であつて、ギリシマ正教会の衰退は、日本の風土の中にギリシマ正教が、

いかんたる信仰上の、教義上の信念をもって行動したか、いかなる受容の形態を示していったのかを、明らかにすることにおいて解答し得ると看える。ギリシマ正教は、教義的には旧教であるが、信徒の意識の点においてはプロテスタント的であつたと、私は判断している。このことは、李多庸一、南池九郎、弘前教会（ヘメソジスト派・新教）―東興義塾―共同会、源晟、南春茂―八戸光栄教会（ギリシマ正教・旧教）―暢伸社―土曜会という図式を比較して、一体どの点が、当時の先駆的事業において異つてゐるだろうか。およそ当時のクリスチヤンの受容意識には、教派による明確な行動規範となるべきものをもたなかつたのである。

註

①「八戸の歴史」下―参照（八戸社会経済史研究会編、北方春秋社、昭和三十七年）。

②「日本正教伝道誌」巻二、七十三頁。

③青森県庁所蔵文書、同「県史」オ七巻四十頁。

④陸奥国八戸光栄会名録（八戸市中里眞氏蔵）によると、明治九年十月七日、宮城県士族仙台教会朽木ベトルを伝教者に、パウエル沢江塚馬が受洗者となつて、受洗者筆頭に源晟（廿六才三カ月）の名が見える。

⑤註③に同じ。

⑥中里眞氏現蔵。同氏の御好意により借覧利用するこ

とを許された。粗末な紙に鉛筆書きのメモで、書体がかなり乱れ判読に困難をさわめたが、内容はかなり重要なるものを含む。他日紹介の機を得たい。

⑤教会堂の鐘の音が朝夕函館の街に鳴りひびいたところから俗採されたもの。

⑥「青森県史」オ七巻二百七十七頁。

⑦「青森県概覧」(昭和三年)、県勢の各分野の状況を網羅したもの。利用価値はきわめて高い。

⑧中里進「源義経伝」(『世代』十四号、昭和三十一年)。

⑨「隅谷三喜男「現代日本とキリスト教」(新教出版社、昭和三十六年)十五頁。

⑩「八戸の正史」下1、小野久三「青森県政治史」参照。

⑪「八戸の正史」下1、ギリシマ正教徒産馬橋樓を指導すの項参照。

⑫「同右書」下1、九十九頁。

⑬小野久三前掲書五百十五頁。

⑭「同右書」五百四十六頁。

⑮「青森県概覧」

⑯森明「八戸警察署沿革史」(明治三十五年)

⑰「北奥羽の現勢」(デリー東北社刊、昭和四十年)

⑱「民権運動の横手源義経」の項(中里進氏執筆)。

⑲「鹿野正直「明治の悪徳」(六、拒絶する精神の構

造)参照)。

⑳小崎弘直「キリスト教と我団体」(『小崎弘直全集』オ二巻)に「キリスト教に適合するのは君主制である。(中略)基督教においては君主と信仰とは相離るべからざるものであり、其の悪臣となり、皇室の羞恥となるものは此の信仰を有するであらう。」と述べているのはその代表的例である。本多庸一は、天皇制、国家権力は地上の支配者にすぎないという独自の見識をもっており、「国家と宗教の衝突」論争における彼の反論は、よくこの主張を示している。但し、彼が明治の武士道的クリスチヤンで、時代の枠の中に生きた人間であつたことを思えば、真向から天皇制批判、国家権力への抵抗などは出来得なかつたことは致し方ない。

㉑工藤英一「文部省訓令才十二号とキリスト教学校」(『福音と世界』一九五七・二月号)

(以下、次号)

★執筆者紹介

佐藤和夫 捜真女子高等学校教諭

桜庭秀俊 青森県立野辺地高校通信制教諭